

●はじめに

筆者は昨年2023年9月から一般社団法人大学行政管理学会(以下、JUAM)の会長を務めている。このたびはJUAMについて寄稿する機会を頂いたことに感謝申し上げます。

JUAMは1997年1月に設立され、大学職員を中心に1200人弱の会員を要する団体である。法人の目的は「大学の行政管理について実践的、理論的に研究し、大学行政管理にたずさわる人材の育成をおして、大学の発展に寄与すること」である。

さて、筆者は4、5年前に「未来の当事者である若手教職員を意思決定に参加させよう」というタイトルで本紙に寄稿させていただいたことがある。中央教育審議会が2018年に取りまとめた「2040年に向けた高

等教育のグランドデザイン」の委員の年齢構成に触れつつ、「将来に向けた意思決定においては、年功序列を排し「未来の当事者」の意見を取り入れる」との考えを述べたものである。そこで、今回はJUAMの活動の特色や価値を紹介させていただくとともに、2040年のJUAMに向けて筆者自身が大切だと考えることを、あくまでも私見として述べることにしたい。



●ハードルの低いアウトプットの場

に取り組んでいる。そのような活動から多くの大学職員が持つJUAMの印象は「意識の高い職員の集まり」「大変そう」など、若干ハードルが高く感じるようだ。しかし実際はそのようなこともなく、筆者自身も年一回開催される学会の研究会に懇親会目当てで参加する程度であったが、その研究会で会

「未来の当事者」積極的に参加

2040年の大学行政管理学会に向けて

ット主体になりがちであり、このように比較的気軽にアウトプットできる場は貴重で、JUAMの大きなメリットと大きく認識している。

●実践的な研究を行う場 JUAMは「学会」である。毎年学会誌を発行しており、論文等の掲載にあたっては査読も行われている。一方、「職能重視する」という方向性は欠かせない。学会誌に

くが大学職員であり、研究会や研究会集会その他のイベントを通して交流できるというのも大きなメリットである。コロナ禍においては、対面の研究会が実施できず苦労したところもあった。一方、この間にオンラインを活用した交流も一般化し、子育てや介護などによって休日や時間外に参加しづらかった層が加わりや

は、積極的な情報共有によって効率化や質の向上が見込める。したがって、交流と情報共有の観点から、JUAMの価値は今なお極めて高いと考

運営され、遠い将来にわたって引き継がれていくべきものだ。したがって、その大学のアドミニストレータの育成を目的としたJUAMにおいて、定年間の者の意見だけで意思決定をするこ

として活躍されている70歳代以上の会員の方など、幅広い会員を擁しているJUAMの運営の課題は、おそろく解決しな

もなく、時代や環境の変化も著しい。このような社会において、年長者の過去の経験だけで未来を導いていくことは極めて困難である。

員の発表を聞くのは楽しく、良い意味でも自由でハードルの低い発表の場であると感ずいた。そこで、入会から数年後に

間の交流の場という機能も色濃く持っている。この2つの側面のどちらが重要であるかについて、学会内ではしばしば議論が

は「論文」「研究ノート」「事例報告」などの掲載区分があるが、本学会においては「論文」の価値が高く「事例報告」の価値が低いなどとい

すくなったというメリットも生じた。年一回の研究会集会も、コロナ禍前の対面のメリットを生かしつつ、オンラインでの参加も可能な形式が定着し

比率が比較的高い。これは、設立当初の目的が大さを示すもので、今後とも維持すべきルールである

●上の世代に意見が言える組織に たが、そのようなルールだけでは、20歳代の若手会員から50歳代60歳代のトップマネジメント層

の現役職員、設立当初に尽力され今なお名誉会員の進歩を例にあげるまで

増えている。さらに人工知能の技術を持たれた方は、「JUAM 入会案内」で検索してください。

大学行政管理学会
会長(工学院大学) 杉原明